

# 修禪寺物語

岡本綺堂

青空文庫



（伊豆の修禪寺しゆぜんじに頼家よりいえの面おもてというあり。作人も知れず。由来もしれず。木彫の仮面めんにて、年を経たるまま面目分明ならねど、いわゆる古色蒼然そうぜんたるもの、観来みたつて一種の詩趣をおぼゆ。当時を追懐してこの稿成る。）

## 登場人物

おもてつくりし  
面作師

やしやおう  
夜叉王

夜叉王の娘

かつら

同

かえで

かえでの婿 春彦

源左金吾頼家げんざきんご

下田五郎景安かげやす

金窪兵衛尉行親かなくぼひょうえのじょうゆきちか

修禪寺の僧

行親の家来など

第一場

伊豆の国狩野かのの庄、修禪寺村（今の修善寺）桂川のほとり、  
夜叉王の住家。

藁葺きの古びたる二重家体。破れたる壁に舞樂の面などをかけ、正面に紺暖簾こんのれんの出入口あり。下手に炉を切りて、素焼の土瓶どびんなどかけたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹。そのうしろは畑を隔てて、塔の峰つづきの山または丘などみゆ。元久元年七月十八日。

(二重の上手につづける一間の家体は細工場さいくばにて、三方に古りたる蒲がますだれ簾をおろせり。庭さきには秋草の花咲きたる垣かきに沿うて荒むしろを敷き、姉娘桂、二十歳。妹娘楓、十八歳。相對して紙かみぎぬた砧うたを擣うっている。)

かつら （やがて砧の手をやめる） 一 晌いつときあまりも擣ちつづけたので、肩も腕も痺しびるるような。もうよいほどにして止やみようではないか。

かえで とは言うものの、きのうまでは盆休みであつたほどに、きょうからは精出して働こうではござんせぬか。

かつら 働きたくばお前ひとりで働くがよい。父ととさま様にも春彦どのにも褒ほめられようぞ。わたしはいやじゃ、いやになつた。

（投げ出すように砧を捨つ）

かえで 貧てわざの手業てわざに姉きょうだい妹まいが、年ごろ擣ちなれた紙砧を、とかくに飽きた、いやになつたと、むかしに変わるお前がこのごろの素振りすぶりは、どうしたことことでござるかかのう。

かつら　（あざ笑う）いや、昔とは変らぬ。ちつとも変らぬ。わ  
 たしは昔からこのようなことを好きではなかった。父さまが鎌  
 まくら  
 倉においでなされたら、わたしらもこうはあるまいものを、  
 みようもん  
 名聞かたぎを好まれぬ職人氣質とて、この伊豆いずの山家に隠れ栖すみ、  
 親につれて子供までも鄙ひなにそだち、しようことなしに今の身の  
 上じや。さりとてこのままに朽ち果てようとは夢にも思わぬ。  
 近いためしは今わたしらが擣こつてゐる修禅寺紙、はじめは賤いやし  
 い人の手につくられても、色好紙いろよしがみとよばれて世に出づれば、  
 高貴のお方の手にも触るる。女子おなごとてもその通りじや。たとい  
 賤しゆう育つても、色好紙の色よくば、関白大臣將軍家のおそ  
 ばへも、召し出いだされぬとは限るまいに、賤しずの女めがなりわいの紙

砧、いつまで擣ちおぼえたとして何となろうぞ。いやになつたと  
言うたが無理か。

かえで それはおまえが口癖に言うことじゃが、人には人それぞれ  
れの分があるもの。將軍家のお側近う召さるるなどと、夢のよ  
うなことをたのみにして、心ばかり高う打ちあがり、末はなん  
となろうやら、わたしは案じられてなりませぬ。

かつら お前とわたしとは心が違う。妹のおまえは今年十八で、  
春彦という男を持った。それに引きかえて姉のわたしは、二十はた  
歳ちという今日の今まで、夫もさだめずに過したは、あたら一生  
を草の家やに、住み果つまいと思えばこそじゃ。職人風情ふせいの妻と  
なつて、満足して暮すおまえらに、わたしの心はわかるまいの

う。そらうそぶ  
（空 嘯く）

（楓の婿春彦、二十余歳、奥より出づ。）

春彦 桂どの。職人風情とさも卑しい者のように言われたが、職人あまたあるなかにも、おもてつくりし面作師といえ、世に恥かしからぬ職であろうぞ。あらためて申すに及ばねど、わが日本かいびや開闢くわく以来、はじめて舞楽のおもてを刻まれたは、もつたいなくも聖徳太子、つづいて藤原淡海公、弘法大師、倉部くらべの春日かすが、この人々より伝えて今に至る、由緒ゆいしよ正しき職人とは知られぬか。かつら それは職が尊いのでない。聖徳太子や淡海公という、その人々が尊いのじゃ。かの人々も生業なりわいに、面作りはなされま  
いが……。

春彦 生業にしては卑しいか。さりとは異なることを聞くものじやの。この春彦が明日にもあれ、稀代の面おもてをつくり出いだして、天下の一の名を取つても、お身は職人風情と侮あなどるか。

かつら 言おんでもないこと、天下一でも職人は職人じや、殿上人や弓取りとは一つになるまい。

春彦 殿上人や弓取りがそれほどに尊いか。職人がそれほどに卑しいか。

かつら はて、くどい。知れたことじやに……。

（桂は顔をそむけて取り合わず。春彦、むつとして詰めよるを、楓はあわてて押し隔てる。）

かえで ああ、これ、一旦こうと言ひ出したら、あくまでも言ひ

募るが姉さまの氣質、逆ろうては悪い。いさかいはもう止してください。

春彦 その氣質を知ればこそ、日ごろ堪忍していれど、あまりと言えば詞が過ぐる。女房の縁につながりて、姉と立つればつけ上り、ややもすればわれを軽しむる面憎さ。仕儀によつては姉とは言わさぬ。

かつら おお、姉と言われずとも大事ござらぬ。職人風情を妹婿に持ったとて、姉の見得にも手柄にもなるまい。

春彦 まだ言うか。

（春彦はまたつめ寄るを、楓は心配して制す。この時、細工場の簾のうちにて、父の声。）

夜叉王 ええ、騒がしい。鎮しずまらぬか。

(これを聴きて春彦は控える。楓は起つて蒲簾をまけば、伊豆の夜叉王、五十余歳、烏帽えぼし子、筒袖つつそで、小袴にて、鑿のみと槌つちとを持ち、木彫の仮面めんを打っている。膝ひざのあたりには木の屑くずなど取り散らしたり。)

春彦 由なきことを言い募つて、細工のおさままたげをも省みぬ不調法、なにとぞ御料簡ごりょうけんくださりませ。

かえで これもわたしが姉様に、意見がましいことなど言うたが基もと。姉様も春彦どのも必ず叱しかつて下さりまするな。

夜叉王 おお、なんで叱ろう、叱りはせぬ。姉妹の喧嘩いさかいはままたあることじゃ。珍らしゆうもあるまい。時に今日ももう暮るる

ぞ。秋のゆう風が身にしみるわ。そちたちは奥へ行つて夕飯ゆうまの支度、燈火あかりの用意でもせい。

二人 あい。

(桂と楓は起つて奥に入る。)

夜叉王 のう、春彦。妹とは違つて気がさの姉じゃ。同じ屋根の下に起き臥ふしすれば、一年三百六十日、面白からぬ日も多かるうが、何事もわしに免じて料簡せい。あれを産んだ母親は、そのむかし、都の公家衆くげしゅうに奉公したものの、縁あつてこの夜叉王と女夫めおとになり、あずまへ流れ下つたが、育ちが育ちとて気位高く、職人風情に連れ添うて、一生むなしく朽ち果つるを悔みながらに世を終つた。その腹を分けた姉妹、おなじ胤たねとはいいな

がら、姉は母の血をうけて公家氣質、妹は父の血をひいて職人氣質、子の心がちがえば親の愛も違うて、母は姉びいき、父は妹らち。思ひ思いに子どもらちの鼻肩争いから、埒もない女夫喧嘩などしたこともあつたよ。はははははは。

春彦 そう承われれば桂どのが、日ごろ職人をいやしみ嫌い、世にきこえたる殿上人か弓取りならでは、夫に持たぬと誇らるるも、母御ははごの血筋をつたえしたため、血は争われぬものでござりまするな。

夜叉王 じやによつて、あれが何を言おうとも、滅多に腹は立てまいぞ。人を人とも思わず、氣位きぐらい高う生まれたは、母の子なれば是非がないのじや。

（暮の鐘きこゆ。奥より楓は燈台を持ちて出づ。）

春彦 おお、取り紛れて忘れていた。これから大仁おおひとの町まで行って、このあいだあつら誂えておいた鑿のみと小刀さすがをうけ取って来ねばなるまいか。

かえで きようはもう暮れました。いつそ明日あすにしなされては……。

春彦 いや、いや、職人には大事の道具じや。一刻も早う取り寄せておこうぞ。

夜叉王 おお、職人はその心がけがのうてはならぬ。更ふけぬ間に、ゆけ、行け。

春彦 夜とは申せど通いなれた路、一いっとき晌ときほどに戻って来ます。

(春彦は出てゆく。楓は門かどにたちて見送る。修禪寺の僧一人、燈籠とうろうを持ちて先に立ち、つづいて源の頼家卿、二十三歳。あとより下田五郎景安、十七八歳、頼家の太刀をささげて出づ。)

僧 これ、これ、將軍家のおしのびじや。粗相があつてはなりませぬぞ。

(楓ははツと平伏ひれふす。頼家主従すすみ入れば、夜叉王も出で迎える。)

夜叉王 思いもよらぬお成りとして、なんの設けもござりませぬが、まずあれへお通りくださりませ。

(頼家は縁に腰をかける。)

夜叉王　して、御用の趣は。

頼家　問わずとも大方は察しておろう。わが面めんてい体を後のかたみに残さんと、さきにその方を召し出し、頼家に似せたる面おもてを作れと、絵姿までも遣つかわしておいたるに、日を経るも出しゅつ来らいせず、幾たびか延引を申し立てて、今まで打ち過ぎしは何たることじゃ。

五郎　多寡たかが面一つの細工、いかに丹精を凝らすとも、百日とは費すまい。お細工仰せつけられしは当春の初め、その後すでに半年をも過ぎたるに、いまだ献上いたさぬとはあまりの懈怠けたい、もはや猶予は相成らぬと、上様うえさまの御機嫌ごきげんさんざんじゃぞ。

頼家　予は生まれついでにの性急じゃ。いつまで待てど暮せど埒あ

かず、あまりに齒痒はがゆう覚ゆるまま、この上は使いなど遣わすこと無用と、予がじきじきに催促にまいった。おのれ何ゆえに細工を怠りおるか。仔細をいえ、仔細を申せ。

夜叉王 御立腹おそれ入りました。ござりまする。もつたいなくも

征夷大將軍、源氏の棟とうりよう梁のお姿を刻めとあるは、職のほま

れ、身の面目、いかでか等閑なおよさりに存じましようや。御用うけた

まわりてすでに半年、未熟ながらも腕限り根かぎりに、夜昼となく打ちましても、意にかなうほどのもの一つもなく、さらに打ち替え作り替えて、心ならずも延引に延引をかさねましたる次第、なにとぞお察しくださりませ。

頼家 ええ、催促の都度におなじことを……。その申しわけは聞

き飽いたぞ。

五郎 この上はただ延引とのみで相済むまい。いつのころまでにはかならず出来るか、あらかじめ期日をさだめてお詫わびを申せ。

夜叉王 その期日は申し上げられませぬ。左に鑿をもち、右に槌

を持ってば、面はたやすく成るものと思し召すか。家をつくり、

塔を組む、番ばん匠しょうなどとは事変りて、これは生しょうなき粗木あらきを

削り、男、女、天人、夜叉、羅刹らせつ、ありとあらゆる善悪邪正の

たましいを打ち込む面作師。五体にみなぎる精せい力りきが、両かの腕うで

におのずから湊あつまる時、わがたましいは流るるごとく彼に通い

て、はじめて面も作られます。ただしその時は半月の後か、

一月の後か、あるいは一年二年の後か。われながら確しかとはわか

りませぬ。

僧　これ、これ、夜叉王どの。上様は御自身も仰せらるるごとく、至つて御性急でおわします。三島の社の放し鰻うなぎを見るように、ぬらりくらりと取止めのないことばかり申し上げていたら、御疝癰しんじゆがいよいよ募ろうほどに、こなたも職人冥利みょうり、いつのころまでと日を限きつて、しかと御返事を申すがよかろうぞ。

夜叉王　じゃと云うて、出来ぬものはのう。

僧　なんの、こなたの腕で出来ぬことがあるう。面作師も多くあるなかで、伊豆の夜叉王といえは、京鎌倉までも聞えた者じゃに……。

夜叉王　さあ、それゆえに出来ぬと言うのじゃ。わしも伊豆の夜

又王と言えば、人にも少しは知られたもの。たといお咎め受きようとも、己が心に染まぬ細工を、世に残すのはいかにも無念じゃ。

頼家 なに、無念じやと……。さらばいかなる祟りを受きようとも、早急には出来ぬというか。

夜叉王 恐れながら早急には……。

頼家 むむ、おのれ覚悟せい。

(癩癧募りし頼家は、五郎のささげたる太刀を引つ取つて、あわや抜かんとす。奥より桂、走り出づ。)

かつら まあ、まあ、まあ、お待ちくださりませ。

頼家 ええ、退け、のけ。

かつら まずお鎮まりくださりませ。面はただ今献上いたしまする。のう、父様。

（夜叉王は黙して答えず。）

五郎 なに、面はすでに出来しておるか。

頼家 ええ、おのれ。前後不揃ふぞろいのことを申し立てて、予をあざむこうでな。

かつら いえ、いえ、嘘うそいつわりではござりませぬ。面はたしかに出来しております。これ、父様。もうこの上は是非がござんすまい。

かえで ほんにそうじゃ。ゆうべようやく出来したというあの面を、いつそ献上なされては……。

僧　それがよい、それがよい。こなたも凡夫じゃ。名も惜しかろうが、命も惜しかろう。出来した面があるならば、早う上様にさしあげて、お慈悲をねがうが上分別じゃぞ。

夜叉王　命が惜しいか、名が惜しいか。こなた衆の知ったことではない。黙っておいやれ。

僧　さりとて、これが見ていらりようか。さあ、娘御。その面を持って来て、ともかくも御覧に入れたがよいぞ。早う、早う。

かえで　あい、あい。

（かえでは細工場へ走り入りて、木彫の仮面めんを入れたる箱を持ち出づ。桂はうけ取りて頼家の前にささぐ。頼家は無言にて桂の顔をうちまもり、心少しく解けたる体なり。）

かつら　いつわりならぬ証拠、これ御覧くださりませ。

（頼家は仮面を取りて打ちながめ、思わず感嘆の声をあげる

。）

頼家　おお、見事じゃ。よう打ったぞ。

五郎　上様おん顔に生写しじや。

頼家　むむ。（飽かず打ちまも成る）

僧　さればこそ言わぬことか。それほどの物が出来していながら、  
とこう洩っておられたは、夜叉王どのも気の知れぬ男じや。は  
はははは。

夜叉王　（形をあらためる）何分にもわが心になわぬ細工、人  
には見せじと存じましたが、こう相成つては致し方もござりま

せぬ。方々にはその面をなんと御覧なされます。

頼家 さすがは夜叉王、あつぱれの者じゃ。頼家も満足したぞ。

夜叉王 あつぱれとの御賞美ははばかりながらおめがね違い、それは夜叉王が一生の不出来。よう御覧ごろうじませ。面は死んでおります。

五郎 面が死んでおるとは……。

夜叉王 年ごろあまた打つたる面は、生けるがごとしと人も言い、われも許しておりましたが、不思議やこのたびの面に限つて、幾たび打ち直しても生きてる色なく、たましいもなき死人の相……。それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面でござりまする。

五郎 そちはさように申しても、われらの眼にはやはり生きたる人の面……。死人の相とは相見えぬがのう。

夜叉王 いや、いや、どう見直しても生しょうある人ではござりませぬ。

しかも眼まなこに恨みを宿し、何者をか呪のろうがごとき、怨おんり靈りょう怪あやか

異しなんどのたぐい……。。

僧 あ、これ、これ、そのような不吉のことは申さぬものじや。

御意ぎよいにかなえばそれで重ちゆう畳じよう、ありがたくお礼を申されい。

頼家 むむ。とにもかくにもこの面は頼家の意にかのうた。持ち

帰るぞ。

夜叉王 強たつて御所望ごしよもうとござりますれば……。。

頼家 おお、所望じや。それ。

(頼家は頤あごにて示せば、かつら心得て仮面を箱に納め、すこしく媚こびを含みて頼家にささぐ。頼家はさらにその顔をじつと視る。)

頼家 いや、なおかさねて主人あるじに所望がある。この娘を予が手もとに召し仕つかいとう存ずるが、奉公さする心はないか。

夜叉王 ありがたい御意にござりまするが、これは本人の心まかせ、親の口から御返事は申し上げられませぬ。

(桂は臆せず、すすみ出づ。)

かつら 父様。どうぞわたしに御奉公を……。

頼家 うい奴じや。奉公をのぞむと申すか。

かつら はい。

頼家 さらばこれよりその面をささげて、頼家の供してまいれ。

かつら かしこまりました。

(頼家は起つ。五郎も起つ。桂もつづいて起つ。楓は姉たもとの袂をひかえて、心もとなげに囁く。)

かえで 姉さま。おまえは御奉公に……。

かつら おまえは先ほど、夢のような望みと笑うたが、夢のよう  
な望みが今かのうた。

(かつらは誇りがに見かえりて、庭に降り立つ。)

僧 やれ、やれ、これで愚僧もまず安堵あんどいたした。夜叉王どの、  
あすまた逢あいましょうぞ。

(頼家は行きかかりて物につまずく。桂は走り寄りてその手

を取る。）

頼家 おお、いつの間にか暗うなつた。

（僧はすすみ出でて、桂に燈籠を渡す。桂は仮面の箱を僧にわたし、われは片手に燈籠を持ち、片手に頼家をひき出て出づ。夜叉王はじつと思案の体なり。）

かえで 父さま、お見送りを……。

（夜叉王は初めて心づきたるごとく、娘とともに門口に送り出づ。）

五郎 そちへの御褒美は、あらためて沙汰するぞ。

（頼家らは相前後して出でゆく。夜叉王は起ち上りて、しばらく黙然としていたりしが、やがてつかつかと縁にあがり、

細工場より槌を持ち来たりて、壁にかけたるいろいろの仮面を取り下し、あわや打ち砕かんとす。楓はおどろきて取りすが縋る。）

かえで ああ、これ、なんとなさる。おまえは物に狂われたか。

夜叉王 せっぱ詰まりて是非におよばず、拙つたなき細工を献上したは、

悔んでも返らぬわが不運。あのような面が將軍家のおん手に渡

りて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と宝物帳にも記しるされて、百

千年の後までも笑いをのこさば、一生の名折れ、末代の恥辱、

所詮しよせん夜叉王の名は廃すたつた。職人もきよう限り、再び槌は持つ

まいぞ。

かえで さりとは短気でござりましょう。いかなる名人上手でも

細工の出来不出来は時の運。一生のうちにも一度でもあつぱれ名作が出来ようならば、それがすなわち名人ではござりませぬか。

夜叉王　むむ。

かえで　拙い細工を世に出したをそれほど無念と思し召さば、これからいよいよ精出して、世をも人をもおどろかすほどの立派な面を作り出し、恥を雪いでくださりませ。

（かえでは縫りて泣く。夜叉王は答えず、思案の眼を瞑じている。日暮れて笛の声遠くきこゆ。）

## 第二場

おなじく桂川のほとり、こけいきよう虎溪橋の袂。川辺には柳いくもと幾本たちて、すすきあし芒と荻とみだれ生いたり。橋を隔てて修禪寺の山門みゆ。同じ日の宵。

(下田五郎は頼家の太刀を持ち、僧はめん仮面の箱をかかえて出づ。)

五郎 上様は桂どのと、川辺づたいにそぞろ歩き遊ばされ、お供のわれわれは一足先へまいれとの御意であつたが、修禪寺の御座所もはや眼のまえじや。この橋の袂たもとにたたずみて、お帰りを暫時相待とうか。

僧 いや、いや、それはよろしゆうござるまい。桂殿たおやという嬪

女めをお見出しあつて、浮れあるきに余念もおわさぬところへ、われわれのごとき邪魔げどう外道が付き纏まとうては、かえつて御機嫌を損ずるでござらうぞ。

五郎 なにさまのう。

(とは言いながら、五郎はなお不安の体にてたたずむ。)

僧 ことに愚僧はお風呂ふろの役、早う戻もどつて支度をせねばなるまい。  
五郎 お風呂とておのずと沸いて出づる湯じゃ。支度を急ぐこと  
もあるまいに……。まずお待ちやれ。

僧 はて、お身にも似合わぬ不粋をいうぞ。若き男おとこ女おんながむつまじゆう語らうているところに、法師や武士は禁物じゃよ。は

はははは。さあ、ござれ、ござれ。

(無理に袖をひく。五郎は心ならずも曳かるるままに、打ち連れて橋を渡りゆく。月出づ。桂は燈籠を持ち、頼家の手をひきて出づ。)

頼家 おお、月が出た。河原づたいに夜ゆけば、芒にまじる芦の根に、水の声、虫の声、山家やまがの秋はまたひとしおの風情ふせいじやのう。

かつら 馴なれてはさほどにもおぼえませぬが、鎌倉山の星月夜とは事変りて、伊豆の山家の秋の夜は、さぞお寂しゅうござりましょう。

(頼家はありあう石に腰打ちかけ、桂は燈籠を持ちたるまま、

橋の欄に凭りて立つ。月明らかにして虫の声きこゆ。）

頼家 鎌倉は天下の覇府、大小名の武家小路、豊をならべて綺羅を競えど、それはうわべの榮えにて、うらはおそろしき罪の巷、悪魔の巢ぞ。人間の住むべきところでない。鎌倉などへは夢も通わぬ。（月を仰ぎて言う）

かつら 鎌倉山に時めいておわしなば、日本一の將軍家、山家そだちのわれわれは下司にもお使いなされまいに、御果報拙いがわたくしの果報よ。忘れもせぬこの三月、窟詣での下向路、桂谷の川上で、はじめて御目見得をいたしました。

頼家 おお、その時そちの名を問えば、川の名とおなじ桂と言うたな。

かつら まだそればかりではござりませぬ。この窟のみなかみには、ふたもと一本の桂の立木ありて、その根よりおのずから清水を噴き、末は修禪寺にながれて入れば、川の名を桂とよび、またその樹をめおと女夫の桂と昔よりよび伝えておりますと、お答え申し上げましたれば、おまえ様はなんと仰せられました。

頼家 非情の木にも女夫はある。人にも女夫はありそうな……と、たわむつい戯れに申したのう。

かつら お戯れかは存じませぬが、そのお詞がことば冥加みょうがにあまりて、この願がんかならずかなうようと、百日のあいだ人にも知らさず、窟へ日参いたせしに、女夫の桂のしるしありて、ゆくえも知れぬ川水も、うれ嬉しき逢瀬おうせにながれ合い、今月今宵おん側近う、召

し出されたる身の冥加……。

頼家 武運つたなき頼家の身近うまいるがそれほどに嬉しいか。

そちも大方は存じておろう。予には比企ひきの判官はんがん能員よしかずの娘わ若

狭かさといえる側女そばめありしが、能員ほろびしその砌みぎりに、不憫ふびんや若狭

も世を去つた。今より後はそちが二代の側女、名もそのままに

若狭と言え。

かつら あの、わたくしが若狭つぼねの局と……。ええ、ありがとうご

ざりまする。

頼家 あたかき湯わの湧くところ、温かき人の情も湧く。恋をう

しないし頼家は、ここに新しき恋を得て、心の痛みもようやく

癒えた。今はもろもろの煩惱ぼんのうを断つて、安らげくこの地に生

涯を送りたいものじゃ。さりながら、月には雲の障りあり。その望みもはかなく破れて、予に万一のことあらば、そちの父に打たせたるかのおもてを形見と思え。叔父の蒲殿かぼどのは罪のうして、この修禪寺の土となられた。わが運命も遅かれ速かれ、おなじ路をたどろうも知れぬぞ。

(月かくれて暗し。籠手こて、臙当すねあて、腹巻したる軍兵つわもの二人、  
上下よりうかがい出でて、芒むらに潜む。虫の声にわかになむ。)

かつら あたりにすだく虫の声、吹き消すように止みましたは…  
…。

頼家 人やまいりし。心をつけよ。

(金窪兵衛尉行親、三十余歳。烏帽子えぼし、直垂ひたたれ、籠手、臙当にて出づ。)

行親 上うえ、これに御座遊ばされましたか。

頼家 誰じゃ。

(桂は燈籠をかざす。頼家透すかしみる。)

行親 金窪行親でござりまする。

頼家 おお、兵衛か。鎌倉表おもてより何としてまいった。

行親 北条殿のおん使いに……。

頼家 なに、北条殿の使い……。さてはこの頼家を討とうがためな。

行親 これは存じも寄らぬこと。御機嫌伺いとして行親参上、ほ

かに仔細もござりませぬ。

頼家 言うな、兵衛。物の具に身をかためて夜中の参入は、察するところ、北条の密意をうけて予を不意撃ちにする巧みであるが……。

行親 天下ようやく定まりしとは申せども、平家の残党ほろびつゝさず。かつは函根はこねより西の山路に、盜賊ども徘徊はいかいする由きこえましたれば、路次の用心としてかようにいかめしゆう扮装いでたち申した。上に対したてまつりて、不意撃ちの狼藉ろうぜきなど、いかで、いかで……。

頼家 たといいかように陳ずるとも、憎き北条の使いなんどに対面無用じや。使いの口上聞くにおよばぬ。帰れ、かえれ。

(行親は騒がず。しずかに桂をみかえる。)

行親 これにある女によしよう性は……。

頼家 予が召仕おなごいの女子じやよ。

行親 おんつつし謹みの身をもつて、素性すじようも得知れぬ賤いやしの女子ども

を、おん側近う召されしは……。

(桂は堪えず、すすみ出づ。)

かつら 兵衛どのとやら、お身は卜者うらやか人相見か。初見ういげんざん参のわ

らわに對して、素姓賤しき女子などと、迂濶うかつに物を申されな。

妻わらわは都のうまれ、母は殿上人にも仕えし者ぞ。まして今は將軍

家のおそばに召されて、若狭の局とも名乗る身に、一応の会釈

もせで無礼の雑言ぞうごんは、鎌倉武士というにも似ぬ、さりとは作

法をわきまえぬ者のう。

(冷笑あざわらわれて、行親は眉をひそめる。)

行親 なに。若狭の局……。して、それは誰に許された。

頼家 おお、予が許した。

行親 北条どのにも謀はからせたまわず……。

頼家 北条がなんじや。おのれらは二口目には北条という。北条がそれほどに尊いか。時政も義時も予の家来じゃぞ。

行親 さりとて、尼御台あまみだいもおわしますに……。

頼家 ええ、くだい奴。おのれらの言うこと、聴くべき耳は持たぬぞ。退すされ、すされ。

行親 さほどにおむずかり遊ばされては、行親申し上ぐべきよう

もござりませぬ。仰せに任せて今宵はこのまま退散、委細は明朝あらためて見参の上……。

頼家 いや、重ねて来ること相成らぬぞ。若狭、まいれ。

（頼家は起ち上りて桂の手を取り、打ち連れて橋を渡り去る。行親はあとを見送る。芒のあいだに潜みし軍兵出づ。）

兵一 先刻より忍んで相待ち申したに、なんの合図もござりませぬば……。

兵二 手を下すべき機おりもなく、空しく時を移し申した。

行親 北条殿の密旨を蒙り、こうむ近寄つて討ちたてまつらんと今宵ひそかに伺候したるが、さすがは上様、早くもそれと覺さとられて、

われに油断を見せたまわねば、無念ながらも仕損じた。この上

は修禪寺の御座所へ寄せかけ、多人数一度にこみ入つて本意を遂ぎようぞ。上様は早業の達人、きんじゆう近習の者どもにも手だれあり。小勢の敵と侮りて不覺を取るな。場所は狭し、夜いくさじや。うろたえて同士どしう撃ちすな。

兵 はつ。

行親 一人はこれより川下へ走せ向うて、村の出口に控えたる者どもに、即刻かかれと下知げじを伝えい。

兵一 心得申した。

(一人は下手に走り去る。行親は一人を具して上手に入る。)

木かげより春彦、うかがい出づ。)

春彦 おおひと大仁の町からもど戻る路々みちみちに、物の具したる兵者つわものが、こ

ここに五人かしこに十人屯たむろして、出入りのものを一々詮議するは、  
 合点がてんがゆかぬと思うたが、さては鎌倉の下知によつて、上様を  
 失いたてまつる結構な。さりとは大事じや。

(遠おちこち近ねとりにて寝鳥のおどろき起つ声。下田五郎は橋を渡りて  
 出づ。)

五郎 常はさびしき山里の、今宵は何とやらん物さわがしく、事  
 ありげにも覚ゆるぞ。念のために川の上かみしも下をみまわ一わたり見廻ろ  
 うか。

春彦 五郎どのではおわさぬか。

五郎 おお、春彦か。

(春彦は近づきてささやく。)

五郎 や、なんと云う。金窪の参入は……。上様を……。しかと左様か。むむ。

(五郎はあわただしく引つ返しゆかんとする時、橋の上より軍兵一人長ながまき巻をたずさえて出で、無言にて撃つてかかる。

五郎は抜きあわせて、たちまち斬きつて捨つ。軍兵数人、上下より走り出で、五郎を押し取りまく。)

五郎 やあ、春彦。ここはそれがしが受け取った。そちは御座所へ走せ参じて、この趣を注進せい。

春彦 はっ。

(春彦は橋をわたりて走り去る。五郎は左右に敵を引き受けて奮闘す。)

## 第三場

もとの夜叉王の住家。夜叉王は門かどにたちて望む。修禪寺にて  
早鐘を撞く音きこゆ。

(向うより楓は走り出づ。)

かえで 父様。夜討ちじや。

夜叉王 おお、むすめ。見て戻ったか。

かえで 敵は誰やらわからぬが、人数はおよそ二三百人、修禪寺

の御座所へ夜討ちをかけましたぞ。

夜叉王　にわかనికిこゆる人馬の物音は、何事かと思うたに、修禪寺へ夜討ちとは……。平家の残党か、鎌倉の討手か。こりや容易ならぬ大変じゃのう。

かえで　生憎あやにくに春彦どのはありあわさず、なんとしたことでござりましような。

夜叉王　われわれがうろうろ立ち騒いだとてなんの役にも立つまい。ただそのなりゆきを観ているばかりじゃ。まさかの時にはおやこ父子が手をひいて立ち退くまでのこと。平家が勝とうが、源氏が勝とうが、北条が勝とうが、われわれにはかかり合いのないことじゃ。

かえで それじゃと言うて不意のいくさに、姉様あねさまはなんとなさ  
りようか。もし逃げ惑うて過失あやまちでも……。

夜叉王 いや、それも時の運じゃ、是非もない。姉にはまた姉の  
覚悟があらうよ。

(寺鐘と陣鐘とまじりてきこゆ。楓は起ちつ居つ、幾たびか  
門に出でて心痛こころいたの体。向うより春彦走り出づ。)

かえで おお、春彦どの。待ちかねました。

春彦 寄せ手は鎌倉の北条方、しかも夜討ちの相談を、測らず木  
かげで立聴きして、その由を御注進申し上げようと、修禅寺ま  
では駈かけつけたが、前後の門はみな囲まれ、翼つばさなければ入るこ  
とかなわず、残念ながらおめおめ戻った。

かえで では、姉様の安否も知れませぬか。

春彦 姉はさておいて、上様の御安否さえもまだわからぬ。小勢ながらも近習の衆が、火花をちらして追つつ返しつ、今が合戦最中じゃ。

夜叉王 なにを言うにも多勢に無勢、御所方ごしよがたとても鬼神ではあるまいに、勝負は大方知れてある。とても逃れぬ御運の末じゃ。蒲殿といい、上様といい、いかなる因縁かこの修禪寺には、土の底まで源氏の血が沁しみるのう。

(寺鐘烈しくきこゆ。春彦夫婦は再び表をうかがい見る。)  
かえで おお、おびただしい人の足音……。鎬しのぎを削る太刀の音：

…。

春彦 ここへも次第に近づいてくるわ。

(桂は頼家の仮面を持ちて顔には髪をふりかけ、ひたたれ直垂を着て長巻を持ち、手てお負いの体にて走り出で、門口に來たりて倒る。)

春彦 や、誰やら表に……。

(夫婦は走り寄りて扶たすけ起し、庭さきに伴い入るれば、桂はまた倒れる。)

春彦 これ、傷は浅うござりまするぞ。心を確かに持たせられい。  
かつら (息もたゆげに) おお妹……。春彦どの……。父様はどこにじゃ。

夜叉王 や、なんと……。

(夜叉王は怪しみて立ちよる。桂は顔をあげる。みなみな驚

く。)

春彦 や、侍さむらいしゆう衆とおもいのほか……。

夜叉王 おお、娘か。

かえで 姉さまか。

春彦 して、この体ていは……。

かつら 上様お風呂を召さるる折から、鎌倉勢が不意の夜討ち……

…。味方は小人数、必死にたたかう。女でこそあれこの桂も、

御奉公はじめの御奉公納めに、この面おもてをつけてお身がわりと、

早速さそくの分別……。月の暗きを幸いに打物とつて庭におり立ち、

左金吾頼家これにありと、呼ばわり呼ばわり走せ出づれば、む

らがる敵は夜目遠目に、まことの上様ぞと心得て、うち洩らさ  
じと追つかくる。

夜叉王 さては上様お身替りと相成つて、この面にて敵をあざむ  
き、ここまで斬り抜けてまいったか。（血に染みたる仮面を取  
りてじつと視る）

春彦 われわれすらも侍衆と見あやまったほどなれば、敵のあざ  
むかれたも無理ではあるまい。

かえで とは言うものの、あさましいこのお姿……。姉様死んで  
下さりまするな。（取り縋りて泣く）

かつら いや、いや。死んでも憾みはない。賤が伏屋でいたずら  
に、百年千年生きたとて何となろう。たとい半晌一晌でも、

將軍家のおそばに召し出され、若狭の局という名をも給わるからは、これで出世の望みもかのうた。死んでもわたしは本望じや。

(云いかけて弱るを、春彦夫婦は介抱す。夜叉王は仮面をみつめて物言わず。以前の修禪寺の僧、頭より袈裟けさをかぶりて逃げ来たる。)

僧 大変じや、大変じや。かくもうて下され、隠もうてくだされ。  
(内に駈け入りて、桂を見てまたおどろく) やあ、ここにも手負いが…。おお、桂殿……。こなたもか。

かつら して、上様は……。

僧 お悼いたわしや、御最期じや。

かつら ええ。(這い起きてきつと視る)

僧 上様ばかりか、御家来衆も大方は斬り死……。わしらも傍そばづ

杖えの怪我せぬうちと、命からがら逃げて来たのじゃ。

春彦 では、お身がわりの甲斐かいもなく……。

かえで ついにやみやみ御最期か。

(桂は失望してまた倒る。楓は取りつきて叫ぶ。)

かえで これ、姉さま。心を確かに……。のう、父様。姉さまが死にまするぞ。

(今まで一心に仮面をみつめたる夜叉王、はじめて見かえる。)

夜叉王 おお、姉は死ぬるか。姉もさだめて本望であろう。父も

また本望じゃ。

かえで ええ。

夜叉王 幾たび打ち直してもこの面に、死相のありありと見えた  
るは、われ拙きにあらず。鈍きにあらず。源氏の將軍頼家卿が  
かく相成るべき御運とは、今という今、はじめて覺つた。神な  
らでは知ろしめされぬ人の運命、まずわが作にあらわれしは、  
自然の感応、自然の妙、技芸神しんに入るとはこのことよ。伊豆の  
夜叉王、われながらあつぱれ天下一じやのう。（快げに笑う）  
かつら （おなじく笑う）わたしもあつぱれお局様じゃ。死んで  
も思いおくことない。ちつとも早う上様のおあとを慕うて、冥め  
土いどのおん供……。

夜叉王 やれ、娘。わかき女子が断末魔の面、後の手本に写しておきたい。苦痛を堪こたらえてしばらく待て。春彦、筆と紙を……。春彦 はっ。

（春彦は細工場に走り入りて、筆と紙などを持ち来たる。夜叉王は筆を執る。）

夜叉王 娘、顔をみせい。

かつら あい。

（桂は春彦夫婦に扶けられて這いよる。夜叉王は筆を執りて、その顔を模写せんとす。僧は口のうちに念仏す。）



# 青空文庫情報

底本：「日本の文学」名作集（一） 中央公論社

1970（昭和45）年7月5日初版発行

初出：「文芸倶楽部」

1911（明治44）年1月

入力：土屋隆

校正：小林繁雄

2006年4月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 修禅寺物語

岡本綺堂

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>